

会津農書

会津は良質な米と農産物の産地として知られ、現在の農家にはその土地に適した専門的な技術が何世紀にもわたって伝えられています。江戸時代初期(1603-1867)に農業が急速に発展しました。それは、会津の農民であり村のリーダーでもあった佐瀬与次右衛門(1630-1711)の功績によるものです。彼は、会津の農業基盤を築くため、自らの体験をもとに農業技術に関する書物を数多く残しました。

与次右衛門は幕の内村(現在の会津若松市の一部)に生まれました。1684 年に最初で最も有名な著書『会津農書』を出版しました。自身の経験や実験の結果、そして他の農民の実践を記したものです。この本はすぐに地域のリーダーたちの関心を集め、それを自分たちの村に応用することになりました。

知識の普及

この本は漢字で書かれていたため、当時の農民には読みにくいものでした。そこで、与次右衛門は、本の内容を紹介するための工夫を凝らし、会津の農業技術を和歌で表現した『会津歌農書』を作成しました。和歌は覚えやすいので、与次右衛門の作品はより多くの人の目に触れることになりました。その後も会津の農業について執筆や助言を行い、1689 年にその功績が認められ、正式に表彰されました。

鶴ヶ城の近くにある福島県立博物館では会津農書や会津の農業の歴史について詳しく知ることができます。